

冷蔵庫が情報センターになる？

－ 高齢者一人暮らしの急病対応の工夫 －

はじめに

最近の冷蔵庫の扉には液晶モニターなどが取り付けられ、いろいろな情報を確認でき、庫内の“お野菜の健康管理”などもできてしまいます。さらに進んでスマート家電（IoT 家電）はインターネットにつながり、人が外から操作したりほかの家電と連携したりできるものもあるようです。

しかし、今まででも多くの人々は冷蔵庫の扉にメモや伝票を貼り付けたりして一家の情報管理に役立ててきたと思います。

突拍子もない話のようですが、一人暮らしのお宅へ救急出動した救急救命士さんたちは冷蔵庫の扉を確認するそうです。そこには家族の連絡先や、次のかかりつけ医受診日のメモ、薬局の伝票などが貼り付けられていることがあるためです。

救急車を要請する際に用意するもの

前回（2016年7月2日号）では、救急病院を受診する際に持参していただきたいものをご紹介します。けれどもご高齢で一人暮らしの方は万一の際に、人へしっかりお話ができなくなっている場合もあります。では救急救命士や病院の医師・看護師の知りたい情報とは何でしょうか。

救命士や救急病院の医師が特に知りたいこと

- 家族、ケアマネ、アパートの大家さんらの連絡先など
- かかりつけ医院名と電話番号および治療中の病名
- お薬手帳と処方薬および保険証の所在（たんすの引き出しの中、本棚の救急箱の中など）

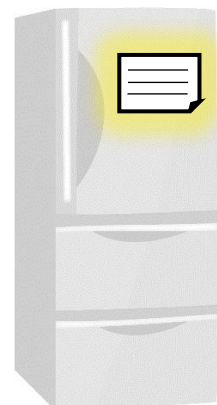
冷蔵庫は“情報センター”

できればこれらの情報を一枚の紙にまとめてメモしていただき、冷蔵庫の扉に貼り付けておいていただければ、万一の時でも救急救命士さんが必要最低限の情報を迅速に集めることが可能になります（ただしルールではないので、必ず見ていただけるかどうかは分かりません）。

何とも安上がりでアナログな方法ですが、今までの生活習慣の延長上にある手段であり、ゆえに救命士への重要な情報伝達手段となり得ます。

また、このメモを時折見直して書き直すことを行えば、改めて生活の現状を確認するとともに、万一の際に何をすべきか考え直すきっかけになります。むしろこのような使い方にこそ意義があると思われれます。

時々実家に戻って来られる娘さんや息子さんがおられるならば、相談しながらメモの内容を見直してみてもいいかもしれません。



■ 救急車を呼ぶ前に（動けなくなるまで様子を見ない）

何事も先手必勝です。動けなくなるまで様子を見てはいけません。また「夜になって心細くなったから」あるいは「明日から連休だから」という理由で救急車を呼ぶのではなく、具合がおかしいと感じたら早めに、できれば午前中にかかりつけ医に相談するか、かかりつけ医を受診するよう心がけてください。

多くの医院・クリニックは午後夕方の診療および土曜日の診療をしています。加えて休日夜間診療所（内科・小児科）が医師会のご厚意で運営されています。初期診療と必要があれば二次病院への紹介転送をしていただけます。

■ 老人福祉施設利用者の場合（施設職員へお願い）

特別養護老人ホームやグループホーム、デイサービスや通所リハビリ施設を利用しておられる方の場合、桐生みどり地区では、“冷蔵庫情報センター”の代わりに医師会、桐生保健福祉事務所、市役所が策定した「施設内患者情報用紙」が運用されています。この用紙を利用していただけば、必要事項を漏れなく救急隊や救急病院へ伝えられるはずです。ご協力をお願いいたします。

■ まとめ

冷蔵庫が家族の掲示板代わりになっている家庭は多いものです。ご高齢で一人暮らしの方は、冷蔵庫を万一の時の情報伝達手段として利用してみてはいかがでしょうか。生活を見直すきっかけにもなります。

【救急科診療部長 野口 修】

